

---

# アンティーク

佐樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンティーク

### 【Nコード】

N1633A

### 【作者名】

佐樹

### 【あらすじ】

彼女への誕生日の為に、アンティークショップでプレゼントを買った僕だけど、それがとんでもないことに・・・

俺の名前は、藤岡鈴音。名前は女みたいだが正真正銘の男だ。

彼女の名前は、赤城芹香。しかし彼女は一応俺の妹でもあり恋人でもある。

何故かって？、

ことの起こりは2年ほど前にさかのぼる。

その当時俺は16才ごく普通の高校1年生、だが小さいときに母を亡くして親父との二人暮らし。

一方の芹香も15才で普通の高校1年生、だが俺と同じで小さいときに父を亡くして母一人子一人の

二人暮らし。

たまたま俺と芹香は同じクラス、席も隣り合わせでふとしたきっかけでつき合うようになった。

それは些細なことだった、1学期の最初の頃だった、授業中隣の彼女が貧血で俺の方へ倒れかけたときに

支えてあげて保健室まで運んだのがきっかけだった。それから後、急に親しくなっつてつき合いだした。

半年もするとお互いの家に行き来するようになっていった。そうこ

うしている内に俺の親父と、芹香の

母親までが仲良くなってしまう、一月もせず二人は結婚することになった。そして二人がわが家に

引っ越してきて、内々の結婚式も終わって新婚旅行へ行つて帰ってくる途中、事故にあつてそのまま

帰らぬ人となつてしまった。帰つてきてから籍を入れる予定だったらしく、俺と芹香は、別姓のまま二人で

暮らすことになった。もつとも二人ともそのころには深く深く愛し合つていて、近い内に結婚しようと思つて

いた。だからそのまま二人で暮らすことに問題はなかった。

そして一年が過ぎた夏のある日

「何がいいかなあー」と、ある物を買うため店を探しまわっていた。

「何を探しているかつて？」

「もちろんきまつてるさ！芹香へのバースデープレゼントさ！」

誕生日が明日にせまっていたので完全に焦り気味になっていたんだ。

芹香は割とアンティークが好きで、いろんなアクセサリーや小物を探しまわつてはよく買ってきていた。

そのため部屋のなかは色々なアンティークが所狭しと飾られ棚のなか何かもいっぱいだった。

そんなわけで、俺も骨董屋を巡り何かいい物がないかと探しまわっていた。

だいぶ前からさがしていたのだがなかなか気にいった物が見つからなかった。が、この日は違っていた。

何が違うってわからないが、今日中には”絶対捜し物が見つかる”のような予感がしていた。

「よし！今日こそいい物を見つけろ！」と、色々の店を巡り探しまわっていた。

しかし、なかなか探している物が見つからなかった。あたりも日が暮れてだんだん暗くなってきた。

「困ったな、今日中に探さないと明日はバイトが詰まっっていて買に行けないからなあー」と、

そのときだった。

いつもは見かけない看板が路地横にあるのを見つけた。

「んーつと、なんだ？暗くてよく見えないが、えーと”あんていーく・黒猫館”か」

「先週もこのあたりまで来たけど気づかなかったな、どうしてだろ

う、まあいつか入ってみるとするか」

入り口にたつて少し中を覗いてみたが薄暗くてよく見えなかったがお客さんはいないようだった。

でも入り口には”OPEN”の札がかかっているのでやっているのは間違いないようだった。

俺は意を決して店へ入ってみた。すると以外にも店内はふつうの明るさだった。どうやら入り口のガラスが

色つきガラスのため暗く見えていたようだ。

「こんにちは」と、俺は声をかけてみた。

が返事はなかったが人のいるような気配は感じていた。

とりあえず俺は店のなかを物色し始めた。

「この店はなかなか良さそうだな、珍しい小物がいろいろあるなあ」と次から次ぎえと見て回った。

しばらく見て回っていると急に声がした。

「いらっしやい、何かお探しかね」

振り向くと老人がたっていた。年の頃は80才くらいだろう、親しみやすそうな雰囲気店主だった。

「すまんの、少しばかり倉庫の整理をしとったのですぐに出てこれ

んかったのー」

「いえいえ、勝手に色々と見させてもらいました。」

「ところでお若いの、何かを真剣に探しておるようだが気に入ったのはあったのかね？」

「えー、色々よいのはあるのですが、これと言った決め手が無くて」

「誰かにあげるのかい？」と、老人に聞かれて俺はちょっと照れながら、

「世界で一番大切な人にあげるんです。」と思わずおもっいきり答えました。

「ほおー、それでどんな物が探しているのかい？」

「エー、小物の身につけるアクセサリーを」

と言うと、老人は「ちょっと待っておれ！確か倉庫を片づけてたらとてもいい物が手できたんじゃ」

「今持ってきてあげるから」と、奥へ行ってしまった。しばらくすると手に一つの小袋を持って出てきた。

「ほら、これなんかどうじゃ」と袋から取り出したのは、美しい”ブレスレット”であった。

材質はわからなかったが、土台はいぶし銀のような深みのある色で表には色々な美しい石が飾って

あつて、内側には文字みたいな模様が彫り込んであつた。

俺はそれを見た瞬間「これしかない！」とおもつた。そして思わず、「それにします！」と、叫んでしまった。

「ほおー、やっぱり気にいつたかい。それなら譲つてあげよう。値段は、えーとまだ決めておらんからのー」

「そうじゃ！お若いの、いくらなら買う気かい？」

と聞かれて俺は愕然とした、一応予算的には2万ぐらい持っていたが、ほかにも買ってやりたい物があつた

ので、とっさに計算して「1万3千円くらいなら」といつてしまった。

すると老人はちよつと考えてから「ほおー、まあよいじゃろ！、ほかにも何か買う予定もありそうじゃの」

「まあ、滅多に客の来ん店じゃからの、さーびすじゃ、1万円であえわい！」

と老人はいつた。

そして俺はポケットからしわくちやの1万円札を取り出して渡して”ブレスレット”のはいつた小袋を受け取り

礼を言つて店を出た。そのころにはあたりはもう真つ暗だつた。

「さて、後は花とケーキを予約して帰るか。」と、俺は家路を急いだ。

そして金曜日、

授業が終わるとバイトへすっ飛んでいき、6時で仕事を上がらせてもらい、花屋とケーキ屋へよって急いで

家路へと急いだ。

「コンコン！」ドアをノックすると俺は急いで花束とケーキを後ろ手に隠した。

「鈴音？」

「芹香！早くあけてくれー」

「ちょっと待ってすぐにあけるからー」

”ガチャガチャ”と鍵の開く音がしてドアが開いた。

「誕生日おめでとう！」と言って俺は真っ赤なバラの花束を差し出した。

「わあー、きれい、鈴音ありがとう！」と言って抱きつき濃厚なキスをした。

「さあ！早く上がって！料理作って待つてたからー」

「はいはい、それでは」と言いながら靴を脱いで上がり「ほら、ケーキだぞ」と、頭の上でぶらぶらさせてみ

た。「もう、鈴音の意地悪」と”プクツ”と膨れてケーキを奪い取った。

「ちょっと待つててね、すぐに用意ができるからねー」

「OK!」と言って、芹香のエプロン姿を座りながら眺めていた。しばらくしてテーブルいっぱい料理が並べ

られた。

そして俺はワインをあけてグラスに注ぎ乾杯をした。

「芹香、あらためて誕生日おめでとう!」

「うん！ありがとう鈴音!」

そして俺はおもむろにプレゼントを差し出した。

「わあー、ありがとうー、開けてもいい?」

「もちろんいいよ!」

「うれしいーなんだろうー」

と、包みを開いていった。

「わあー！とってもステキー！ホントありがとう鈴音！」

そして、さっそく”ブレスレット”をはめていった。

「すごい、私の腕にぴったりだわー」と手首をかざして見せてくれた。

俺は心の中で「一生懸命さがした甲斐があったなー」と思った。

「さあー料理が冷めないうちに食べようぜー！」

「うん！」

そして、色々おしゃべりをしながら芹香と俺は料理を平らげていった。

「ふー、おいしかった。もうお腹いっぱいだよ」

「そうね、あたしも今日はいっぱい食べちゃった！えへ！」

「うーん、後のコーヒーとケーキどうする？」

「うーんとねー、しばらくしてお風呂に入ってからにしましょうよ」

「そうするか！そりじゃ後片付け手伝っよ！」

「うん！」

そうして僕たちはおしゃべりをしながら後かたづけをし、しばらくしてからそれぞれお風呂に入り、食後のお

茶をした。芹香はブレスレットがとても気に入ったみたいで、お風呂を出てからずっと腕にはめていた。

「おいしいー！鈴音！ケーキありがとうね！」

「どういたしまして、芹香が喜んでくれて俺はとってもうれしいよ！」

その後俺たちはレンタルビデオを見ながらのんびりと残りのお茶をした。ふと時計を見ると12時を過ぎよう

としていた。

「せりか！そろそろ寝ようぜ！」

と言って俺は芹香にあっーい口づけをしそして芹香を抱きかかえベツトルームへ向かった。

「もう！鈴音のエッチ！」とか言ってあっーい口づけを返してきた。

そして二人はその夜、熱く激しく燃える夜を過ごした。

そして、眠ってしまった後、”ブレスレット”がうすっすらと光りだし一瞬輝いたかと思っただけで消えてしま

った。





俺は泣いている芹香を抱きしめ、何が原因だろうと考え始めた。

「変わったことと言えば、花束とケーキ・・・はいつも買う店かー」

「・・・・・・・・」

「すると残りはやはりブレスレットだけかなー」

「芹香、ごめんそのブレスレットちよつと外して見せてくれないか」

「・・・・・・・・」

芹香は無言でブレスレットを外して俺に手渡した。

俺はしばらくブレスレットを見回してみた。

「うーん、やっぱりこれかなー、内側の模様、なんか文字にも見えるけどなあー」

すると芹香が布団から顔を出して手を伸ばして「見せて」と言った。

「わかるか!」

確か芹香はアンティークが好きだけあって、割と古い文字なんかも読めるらしいのであった。

「うーんと、この模様見覚えあるわー」と自分の部屋の本棚へ行った。しばらくして古い皮の表紙の本を

持って戻ってきた。そしてしばらくページをめくっていて、

「これよ！これだは！この模様やっぱり文字ね！見て鈴音！ほら！」  
と言われて本を見ると確かに似たような模様が並んでいた。

「芹香もしかして読める？」

「うん！読めると思う！この本に解読表が載ってるから」

そして一生懸命解読を始めた。

俺はそっち方面は全くダメですることがないので二人分のコーヒーを入れ始めた。

「はい、コーヒー」

「ありがとうね」

「なんとかかなりそうかい？」

「ちょっとすり減ってて読みずらいけどいけると思う！だってあたしのカラダがかかっているのですもの！」

そういつて一心に本を見ながら紙にペンを走らせていた。

それから1時間位して、

「だいたいわかったわ！」

「ほんとがよー」

「うん！今から翻訳するわね！」

「我をつけて交わると性が反転せり、元に戻るには交わった相手と3度交わるべし。ただし……」

「後は消えていて全く読めないけどね！」

「ほんとがよー」

「まちがないわ！何度も確認したもの！」

「と、言うことは……俺とその姿でもう一度？」

「……うん！」

「と言われても男同士ではなあー」

「何よ！鈴音！あたしのこと好きじゃないの？」

「好きだよ！世界を敵に廻しても芹香のことが大好きだ！」

「それなら……ね！」

「おいおい芹香！おまえ目つきがおかしいぞ、おい！大丈夫かよ！」

「お願い！実はあたし前から……だったの」って……

「わかった！わかった！買ってきた俺の責任だから何でもしてやる

よ！でも優しくしてくれよな！俺、そんな

の初めてなんだし……」

そうして、俺はいつも芹香にするみたいに、芹香が俺を奪いに来た。そうして俺はカラダに熱いほとばしりを

感じると、そのまま気を失ってしまった。あまりの快感に……、そして芹香も……、

しばらくして俺は目が覚めた。

芹香はまだ気を失ったままだ、俺は芹香を起こした。

「おい！芹香！目をさませよ！芹香ってば！」

「うーん」と芹香が目を覚ました。

「あたし、どうしたのかしら」

「ちょっと、気を失っていただけだよ」

「そうだ！起きたらあたしのカラダが男になって……、そして……鈴音大丈夫？」

「あぁー」

「あたしのカラダ」

まだ男だったが、少しずつ変化が始まっているようだった。

「まだ、あと2回しないと完全に戻らないのね」

「あと2回かー、俺の体が持つかなー」

「何言ってるのよ鈴音、約束したでしょ！責任とるって！」

「ハイハイ、わかってますよお姫様」

「それじゃいい？」

と、芹香を見ると、股間のものが”びんびん”に立っていた。先からは透明な汁がたれていた。

そうして芹香は俺の後ろに回り俺のアトムにそのいきり立ったものを思いつきり差し込んだ。

何故かは知らないが、俺はその行為に酔いしれていった。そして女性みたいにあえいだ。

「鈴音、鈴音、大丈夫？」

俺はやっとの事で意識を取り戻して答えた。

「ふー、すごかった。このままじゃ俺、壊れちまうぜ！」

「ところで芹香の方はどうだい？」

「うん、ちょっとづつ戻っているみたい、見て！胸が！」

見ると確かに少し膨らんできていた、それにカラダ全体にも丸みが出てきていた。

「あと一回ね！」

「うん！」

「えっ！」

「なんだ？」

「なんか今の返事、女の子みたいだったから」

「そうか？、俺は別になんにも意識して言ってないけど、ちょっと休憩しようぜ」

「ダメ、最後の1回終わってからね！」

「早く、あたしに戻りたいもん！だからねっ！」

「わかったよ！」

そのころ俺は、なんか違和感を感じていた。それが何なのかはわからなかったが……

そして、最後の一回を俺は抱かれようとした。

「あれー？」

「どうした芹香？」

「うふふっ、何でもない、」

「なんだよ芹香、早く終わらしてくれよ」

「うん！」

俺は気づいていなかったが、そのころには俺のカラダにも変化が現れてきていた。

「行くよ、鈴音！」

と言つて芹香が俺に入ってきたが、さっきまでとはなんか違うような感じがしていた。

「んっ？」

確かに入れられてる感じはしていたがアトムじゃないような感じがしていた、それに先ほどまでとは違う

強烈な快感の嵐に俺は見舞われた。こうして3回目のアブノーマルなSEXが終わった。

そして芹香は俺から離れた。そして芹香の変化が加速していった。

身長がすこしづつ小さくなり、胸が膨らみ、肩幅が小さくなり、ウエストが細くなり、お尻が膨らみ、あそこの

膨らみも小さくなり、そして女へと戻っていった。

「なんか、前よりも綺麗になったみたいだよ！」

「ホント？ありがと、うれしいわ！一時はどうなるかと思ったけど元に戻ってよかったわー」

「ホント、よかったよ、元に戻って、これで俺もー安心だよ！」

「うん！ありがとうねー！ごめんね！」

「なんだよ、ごめんねって？」

「鈴音、気づいてないのね！」

「何がだよ？」

「からだ！」

「えっ？」

「よく見てー！らなさいよー！」

確かにちょっとおかしいとは思っていたがそれが何かわからなかった。

言われて仕方なく俺はカラダのあちこちを調べ始めた。

「うーん、あまりよく分からないけどなあー」

「ただ、なんか体が柔らかいような気がする。」

「おー？臍毛が無くなって。それに腕の毛も、ひげも伸びてない！」

しかしそれ以上の変化は見つけられなかった。

「芹香、俺まだどっか変わっているのか？」

「わからなーいの？」

「ほかにはこれと言って見あたらないんだけど」

「うふふっ、それじゃ教えーてあげる！」

そうして芹香は俺の前に跪き俺の逸物を持ち上げた。

「おいおい！何するんだよ」

「黙って！ほら！見てごらん！」

俺はかがんで股間を見てみた。俺の息子と、袋があってその後ろには穴が二つ？

「穴が二つあるー！」

「どうわかったあー！」

「ーつはあれだろ、と言っことはもうーつは、そのー、あのー、芹香のと同じってことか？」

「うんっ！そのようだね」

「って、いつ解ったんだい。」

「えへっ！それはね最後にするときになっ！」

「なんか感じなかった？」

「もしかして、」

「そう、」

「こっちの穴に入れたんだな！」

「だから気持ちよかたっただでしょ！」

「……………」

「これもプレスレットのせい？」

「どっやらそうみたいねっ！」

「……………やっぱり消えている後ろの部分に秘密があったんだな  
「！」

「でも、それ以上変化はしないようねっ！どっする？」

「どっするって、仕方がないし」

「別に、普通の生活には困りはしないし」

「こんなもん捨ててくるよー」

「いいわよ捨てなくて！これで男になるとまた鈴音の女の子と・・・うふ！」

「おいおい、本気かよ！冗談だろ！俺はいやだぞ！」

「まあまあ、イーじゃないたまには」ってなあ、おい！

そのときだった、”ブレスレット”が光り出したかと思うと煙のように消えてしまった。

「あーあー、消えちゃったー、これからもっと楽しもうと思っっていたのにーつまらないー！」

って、さっきの本気だったのかよーと俺は思った。

「これでよかったのさー！」

「でもー・・・」

「それでいい・・・」

と、言いかけたときだった。

急に目の前が暗くなってきてしまった。そしてそのまま俺は気を失ってしまった。

そして芹香がびっくりして俺を抱きかかえるとそれは始まった。

背が縮みはじめ着ていた服がだぶつき始めた、と同時に手足も小さく細くなっていった。色も抜けるようになって白くなっていった。

次に、胸が膨らみ始めた。少しずつシャツがテントを張るように膨らんでいった。そして今度はウエストがく

びれ始めズボンが下へとずってしまっただ、が、今度はお尻が膨らんでできていてぱんぱんに膨れてそこでズ

ボンが留まってしまっていた。そして最後にあの部分が膨らんだ風船がしぼむようにして消えてしまった。

そうしては股間には花弁だけが残って”ひくひく”と口を開いて、密を流していた。そうしてカラダの変化が

終わって、

「鈴音、起きてよ！鈴音ったら！」と、俺は揺さぶり起こされた。

「どうしたんだ！俺は！ああーん」

見ると芹香の手が俺の股間をまさぐっていた。

「もうやめてくれよ」

と、言うてはっとした、俺の声が女になっていたのだ。

あわててカラダをまさぐってみると、胸には二つの膨らみが下半身

にはあるべきものが無く、芹香と同じも

のだけになってしまっていた。

「芹香！俺……………」

「だいじょうぶ！あたしにまかせといて！」

つと、目をハート型にした芹香が下着と着替えを用意してうれしそうにしていた。

「……………」

FIN

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1633a/>

---

アンティーク

2010年10月10日06時35分発行